

## 勿凝学問 102

剣を以て戦うの時代には剣術を学ばざれば戦場に向かうべからず、  
商売を以て戦うの世には商法を研究せざれば外国人に敵対すべからず  
——慶應の商学部は僕のゼミのようなものがあったとしても良さそうな理由——

2007年8月19日  
慶應義塾大学 商学部  
教授 権丈善一

今年の桜は早かった。ということで、例年、4月のはじめに出かけている洗足池でのゼミのお花見を、今年は3月27日の入ゼミ選考の日に行った。入ゼミ選考後、新しく迎えた新3年生に、すぐに洗足池に行くようにと伝えて、4年生の先発隊が確保した桜の下のゴザに全員集合して、大宴会。

日も暮れかかり宴もたけなわの頃、わたくしは満開の桜の木の下で、新3年生に2冊の本を紹介した。一冊は、Stiglitzの*The Roaring Nineties*という英書。もう一冊は、その邦訳の、『人間が幸福になる経済とは何か』である。

「英文を読んでは邦訳をながめる——を繰り返しながら熟読して、夏合宿までに、この本の中から三田祭のテーマを考えておいてくれ」と指示を出す。

少し説明しておけば、慶應では11月の三田祭（学園祭）で、ゼミの研究報告を行う。それに向けて、うちのゼミでは次のようなシステムが準備されている。

まず、ゼミの新メンバーが毎年はじめて集まる花見の席で、新3年生を4つのグループに分ける（いつの頃からか、このグループは藩と呼ばれている）。そこでわたくしが、今年は、こういう方向で行こうとちょっとしたヒントを出す。今年は、上に書いたように、「スティグリッツの*The Roaring Nineties*と『人間が幸福になる経済とは何か』を熟読して、テーマを発見しておいで」というものであった。その後、スティグリッツの本を4年生の指導のもとに3年生は輪読しながら、藩毎に、三田祭のテーマを夏合宿まで模索する。夏合宿では、3年生の4つの藩が考えてきた研究テーマを、4年生と大学院生が、3日ほどかけて比較考量し、どの藩のテーマが一番良いかを評価をしながらひとつに絞り込んでいく。そこで絞り込まれたひとつのテーマを、夏合宿以降は、4つの藩で研究していく（つまり、他の3藩のテーマは夏合宿で捨てられる）。もっとも、夏休み以降に同じテーマを研究したとしても、4藩別々に取り組むわけであるから、出来の良い報告ができる藩もあれば、そうでない藩も出てくる。そこで、11月の三田祭当日、来訪者に4つの藩の出来不出来を評価してもらい、それに加えて最終的には、4年、院生、そしてわたくしの評価を足して、優勝藩を決定する。優勝藩のメンバーは、三田祭の打上はただになる！

まあ、毎年、こっちが驚き感心するほどに、3年生は良くやるよなあと、がんばっている。3泊4日の夏合宿の時など、4日目の朝に4年生が結果発表をするまで、3年生は、ほとんど寝ないで、昼も夜も討論しては準備をし、報告しては準備をしている。



3日目の夜 3年生4藩のテーマを比較考量する4年生



僕はといえば、昼は真っ黒に日焼けするほどに、4年生や院生と熱中症の心配をしながら外で遊んでいて、夜の3年生への指導は4年生と院生に任せて、みんなの議論をビールでも飲みながら、ちゃちゃいれてからかって遊んでいるだけ。。

そんなこんなで、今年の夏合宿で、3年生の4藩から出された4つのテーマから、3日目の夜に4年生と院生が徹夜して選んだ最優秀テーマは、

グローバル化が日本の労働市場にもたらした影響  
——グローバル化を利用する黒幕に挑む——

ふ〜んっ、スティグリッツさんは、そういうことを言っているのかあ。3年、4年、そして院生で決めたんだから、まあ、いいんだろうけどね。11月末の三田祭まで、ぐわんばっておくれ。

でっ、勢いでここまで読まれてしまった方々、そして本当は、ゼミの学生や卒業生の中にも、どうして商学部で、こういうことをやっているんだろうかと訝しがる人もいるかもしれない・・・というのが、今日の雑文のお題となるわけである。

タイトルにある、「剣を以て戦うの時代には剣術を学ばざれば戦場に向かうべからず、商売を以て戦うの世には商法を研究せざれば外国人に敵対すべからず」は、1874年、現一橋大学の前身、商法講習所の設立にあたり、福澤諭吉が起草した趣意書の一部である。

福澤諭吉(1874)「商学校を建てるの主意」

・・・

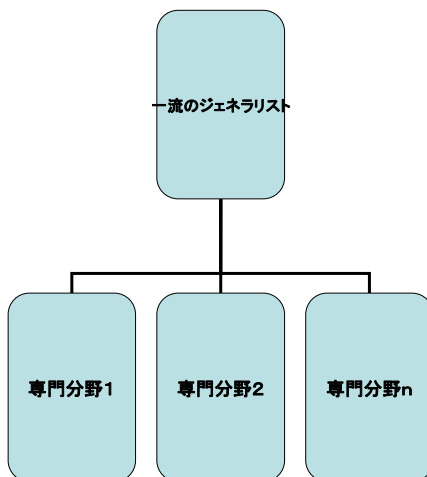
今日に至っては全日本国の富と諸商人の才力とを一に合し、その全体の強弱大小を以て西洋各国のものに比較せざるべからず。目今にいても、あるいは諸開港場に於いて外国人と商売を取組み、一時に勝利を得て数万の富を致すものあらんと雖も、その実は外国人と戦って勝ちたるに非ず、他の日本商人が拙劣なるがために意外に僥倖を得たるのみ。・・・  
維新以来、百時皆進歩改正を勉め、文学を講ずるものあり、芸術を学ぶ者あり、兵制をも改革し、工業をも興し、頗る見るべきもの多しと雖ども、今日に至るまで全日本国中に一所の商学校なきは何ぞや。国の一大欠点と云うべし。凡そ西洋諸国、商人あれば必ず亦商学校あり。猶我武家の世に、武士あれば必ず亦剣術の道場があるが如し。**剣を以て戦うの時代には剣術を学ばざれば戦場に向かうべからず。商売を以て戦うの世には商法を研究せざれば外国人に敵対すべからず。**

・・・

この文中における「商法」とは、商いの世界を統べる原理・法則のようなものであると解釈しても良いと思う。そしてわたくしは、昨2006年7月のオープンキャンパスの際、商学部の教員代表として行った高校生とその親が出席する模擬授業の中で、上記福澤先生の言葉を引用しながら、次のパワーポイントを使い、

## 慶應商学部とは？

- 福澤諭吉が生きた時代の「商学」の意味を忠実に引き継ぐ。
- 市場経済で成立する社会を支え、その社会を豊にすることができる有意な人材を育成する場。
- 一流のジェネラリストの養成を目的とする。



「この国に国富、ゆたかさをもたらすために世界と渡り合ってルールそのものを作ることができる人間こそが、この国にとって最も有為な人材。慶應の商学部とは、要するに、市場経済社会で生き抜き、一国を富ますことのできる能力をもつ人間を養成する。国際的なやりとりの中でこの国に利するグローバルスタンダードをみずから築きあげることができる人間を養成するところです」と話をしたわけである・・・出席していた高校生や彼らの親たちは目を白黒させていたけど、まあ、いいだろう。僕にオープンキャンパスをやらせるほうが悪いヨ(笑)。

だってねえ——たとえば、今年の3年生が三田祭に向けてとりかかるらしいテーマ「グローバル化が日本の労働市場にもたらした影響——グローバル化を利用する黒幕に挑む」であれば、いずれ彼らは、90年代の人材派遣の自由化などを調べる必要に直面するだろうと思う。そしてその人材派遣の自由化は、アメリカ商務省が毎年出してくる「年次改革要望書」を受けてなされていることに気づいてくるとも思うし、「年次改革要望書」を見ているうちに、ここ10数年の規制緩和・民営化論議は、郵政民営化論議を含めて、アメリカの要望に後押しされ、否、アメリカの要望に符合する形でなされてきたことにも気づいてくるであろう。そしていずれは、普通の経済学が教える完全競争モデルなど、大きく国を富ますかどうかの側面ではほとんど役に立たず、世の中というものは、国内外の大資本が、政治に働きかけて自分たちに都合の良いようにルールを変更して富を奪い合う権力闘争の中にあるのが常態であることを知るようになる。

1世紀ほど前、独占資本が市場を求めて軍旗の下での輸出をと帝国主義戦争を起こしたように、いまは、大国の大資本が市場を求めて他国のルール変更を求める新帝国主義とも呼べる形で覇権の強化を図っていること、さらには、彼らのゼミの先生が生息している介護・

医療や保育・教育問題の世界のうち、医療・教育は、彼らが三田祭で取りかかろうとしている労働市場の世界と同様に、実は福澤の言う「外国人に敵対」する主戦場であり、似たようなパワーが力強く作用していることに気づくかもしれない。

表 1 『年次改革要望書』と法律・制度改正

年次改革要望書		日本の法律・制度改正	
1995年	郵便局の保険商品提供禁止	2005年	郵政民営化法案成立
1996年	大規模小売店法廃止 人材派遣の自由化 保険業の自由化	1998年	大店法廃止
		1999年	労働法改正
		1998年	保険業法改正
		2005年	保険業法改正
	外国企業による日本企業の 合併・買収の障害の除去	1997年	持ち株会社解禁
		2000年	時価会計導入
		2003年	商法改正
		2005年	新会社法成立
1999年	簡易保険制度廃止	2005年	郵政民営化法案成立
2000年	外国企業の日本参入・アメ リカ型経営形態導入	2003年	商法改正
		2005年	新会社法成立
2001年	医療制度に市場原理導入	2006年	医療制度改革法成立
2003年	道路公団・郵政公社民営化	2004年	道路公団民営化法成立
		2005年	郵政民営化法成立
2004年	混合診療		今後の政策課題とする

出所) 有森隆+グループ K(2006)『小泉規制改革を利権にした男 宮内義彦』p.46.

こうした考え方の大きなフレームそのものは、スティグリッツの *The Roaring Nineties* にたつぷりと仕込まれているのであり、そういう力学を学びとることが、福澤先生の言う「剣を以て戦うの時代には剣術を学ばざれば戦場に向かうべからず。商売を以て戦うの世には商法を研究せざれば外国人に敵対すべからず」に直線的に通じていく・・・というこ  
とで分かったかい？ 僕が、「スティグリッツ君、彼はノーベル経済学賞をもらっているく  
せに、なかなか良い奴なんだよねえ」と言って君らへの教材として彼の本を使ったり、「今  
時、国際経済だとか労働経済だとか社会保障論だとか、経済学だとか経営学、商業学だ  
とか学問に区分を設けることにはあんまり意味がないんだよなあ」と口走ったり、合宿中に、  
君らがまじめに議論する姿をいろいろとからかって遊んでいた意味を――。

僕のゼミは、福澤先生がイメージしていた「商学」というものに最もダイレクトに取り  
組んでいるんだよ―― Do you understand? 期待すべくは、将来、世界と渡り合っ  
てグローバルスタンダードと成り得るルールをみずから築きあげることができる人物が育って  
くれればとも思うんだけど、まあ、お互い無理をしないで生きていこうな(笑)。

3日目の夜 恒例の花火衣装



2007年8月4日 河口湖畔にて



追記

そういえば、1週間前の8月14日に、石原伸晃自民党幹事長代理による小沢一郎民主党代表に対するコメントがあったので、ここに記載しておく。

「[逆転考 衆参ねじれ国会①](#) 石原伸晃・自民党幹事長代理」

『毎日新聞』2007年8月14日朝刊

——テロ特措法の延長を巡り、小沢一郎民主党代表は反対の姿勢です。

◆小沢さんはシーファー駐日米大使を（民主党本部に）呼びつけた。自民党の竹下派会長代行時代、（総裁候補だった）宮沢喜一さん、渡辺美智雄さん、三塚博さんを呼びつけ「面接」したのと同じ。外交は社交。無礼とまで言わないが、非礼です。小沢さんらが「米国と対等」と言うのはカッコいい。だが横田にも沖縄にも米軍基地があり、まだ占領下の憲法を使っている。絶対に「対等」ではない。

もし本当に「呼びつけ」と評していい面会であったのなら、シーファー駐日米大使は気分を害されたと思うし、いずれどこかで報復されるおそれ大だなという懸念とともに、記憶に強く留まった記事であった。